

特集 ■ 心と脳、リアリティと身体

Meltdown on the Reality



大崎のぶゆき 愛知県立芸術大学
OSAKI NOBUYUKI

作品について

近年の作品制作は「認識する」と「見る」との境界を探り、私たちの身体を座標軸として内部から外部へ、また外部から内部へという振幅に基づいて考えることそのものを方法として作品を制作してきました。例えば、一度見たことのある映画の1シーンや旅行先の風景、雑誌で見つけた写真といった事柄が、曖昧な記憶として認識され自身の中で美化されていたり、他のものと混ざっていたりして歪に記憶している様な体験。また逆に経験したことがない行動や場所に既視感を覚え、記憶認識と見ている風景とがクロスオーバーしてしまう感覚。このような経緯の中で私はリアリティの不確かさを覚え、この世界の在り方を探る手段として作品を制作し、制作方法や工程を自身の存在と外部世界との倒置として捉えながら、「内部」と「外部」「認識すること」と「見る」との関係性を浮遊するリアリティとして平面作品や写真、インスタレーションといった様々な素材、メディアによって展開してきました。

今回、私がこれまで制作してきた作品の幾つかを紹介いたしますが、上記のコンセプトより自身の取り巻く状況を客観的に視覚化しようと試みた“skin hole Project (26～27頁)” (人型ピンホールカメラのプロジェクト)、「認識」や「リアリティ」を考察する視点への移行として生まれた「water drawing (28頁)」「Life Climbing/Climbing the World (29頁)」「dimension wall (30頁)」等の作品です。“skin hole Project”では純粋な外部からの刺激をピンホールレンズを通して認識へと入る前の段階を作品化し、イメージ化される自己の主観要素を排除して私たちの存在の在り方そのものを象徴的に表す作品として制作されました。以降、「認識」と「リアリティ」を考察する作品とした「water drawing」シリーズや「Life Climbing/Climbing the World」のような「描かれた絵画が溶けていく」という作品の制作を始めます。「water drawing」の映像作品は、描かれたドローイングイメージが水の表面張力によって引き裂かれゆっくりと溶けていき、浮遊

する存在に再び変換されてまるで脳内に浮かび上がるイメージの連続のように拠り所の無いモノへと還元していくかのような作品であります。「Life Climbing/Climbing the World」では描かれた「山」のイメージ上に登っているかの様にコラージュされた人形が、イメージが溶けて行く中でそれらの人形も落ちて行くというシニカルなイメージの映像です。私たちが「知っている（と思っている）」既視感のある世界や風景の中で「実は本当は知らない」という事実と、そのような曖昧な認識世界の中で生きる私たちのリアリティの所在を表現しています。「dimension wall」は壁紙のパターンが壁に投影され、そのパターンがゆっくりと流れ溶解し、壁がパターンから溢れ出た色に覆われていきます。

これらの作品はCGで作られたものではなく、実際に描いたイメージが溶け出し、流れ出すことによって「現実や非現実」や「リアリティの不確かさ」を追求する視点と、これらの作品を制作するにあたって実際に描く絵画が「溶けてなくなる」ことから何度も同じ絵を描いて撮影し、その幾多の蓄積の中から1カットを選択するという方法によって、自身の描く行為のそのものの「リアリティ」だけが蓄積される「ある・ない」の境界を垣間みようとする眼差しでもあります。「認識する」と「見る」との二つの境界の「間」を考察し、「メタリアル/メタフィクション」という現代社会における私たちを取り巻く状況から、独自でかつオリジナルの方法を用いて、この世界の「リアリティの不確かさ」を明らかにしようと試みています。

【略歴】

大崎のぶゆき (OSAKI Nobuyuki)

愛知県立芸術大学 美術学部油画専攻 講師

1998年京都市立芸術大学美術学部卒業、2000年京都市立芸術大学大学院美術研究科修了。2007年より現職。最近の展覧会として、2009年「第12回文化庁メディア芸術祭」(国立新美術館、東京)、2010年「あいちアートの森」(東陽倉庫テナントビル、愛知)など。



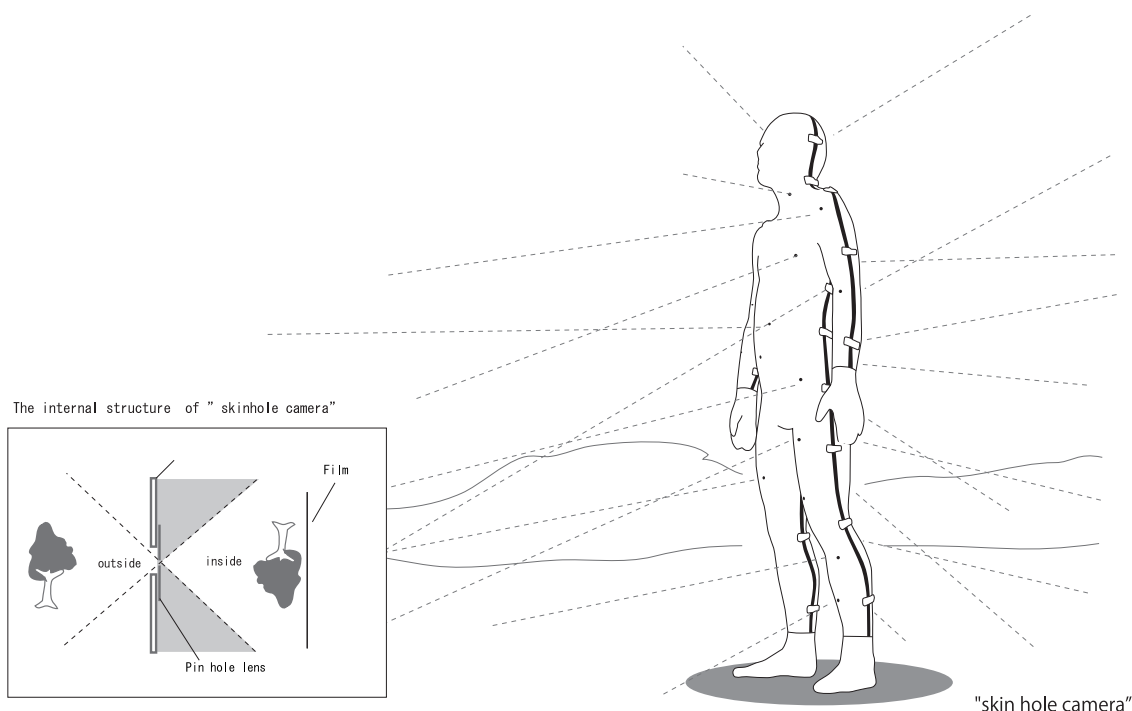
"skin hole Project" [#01 Duesseldorf] 2003

インスタレーション

skin hole camera (人型ピンホールカメラ/ FRP 樹脂、その他)

写真、ドキュメント映像 (11 分)

個展「Between Inside and Outside」展示風景/ Kunstraum, デュセルドルフ

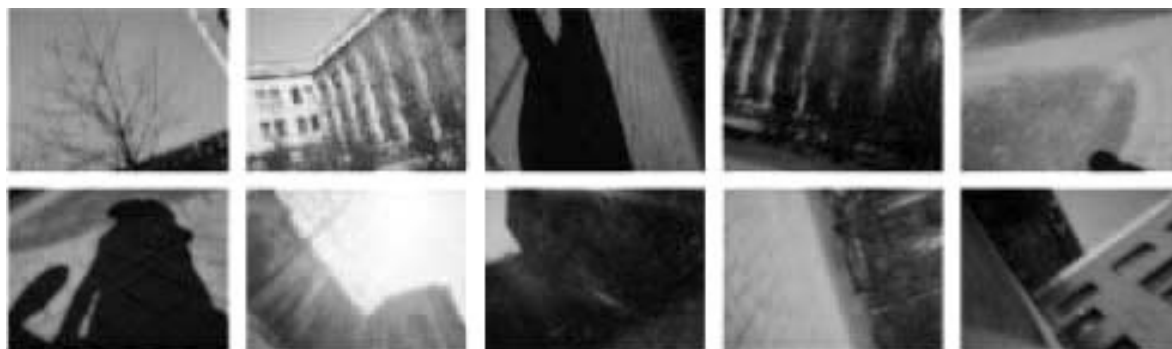


"skin hole Project" 2002-2004

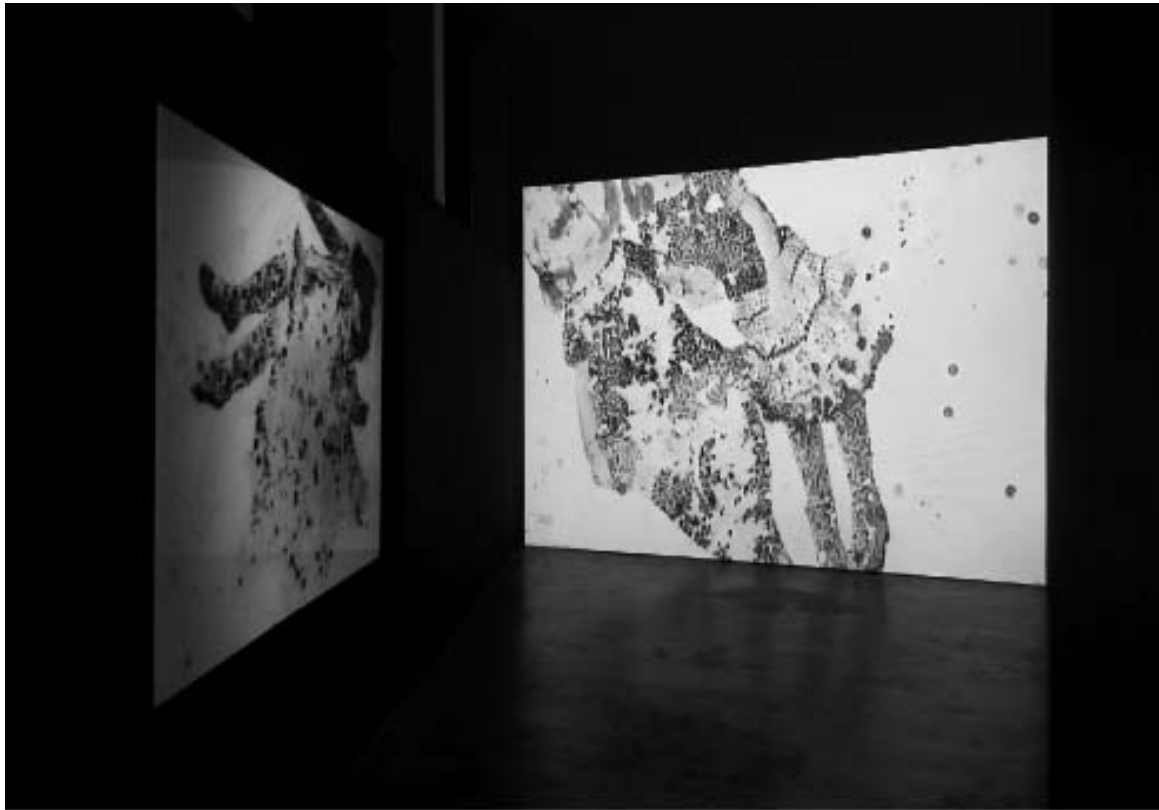
2002年秋に"skin hole camera(人型ピンホールカメラ)"を制作し、実験と試作として行われた「#00 trial」、03年にアーティスト・イン・レジデンスレジデンスで滞在したドイツ・デュッセルドルフ市で行われた「skin hole camera」での撮影と、「skin hole camera」を街中に置いた風景写真で構成される「#01 Duesseldorf」、そして04年に京都の自宅近くで、カラーフィルムを使って撮影された「#02 Kyoto」といった一連の断続的に行われている作品。

なにかを思い出そうとしたとき、場所や物が、記憶の中でひずみをきたすことがある。時としてそれは、美化されていたり、他のものと混ざっていたりして、自分でも信じられないくらい歪んで記憶していたこともあります。見たことのあるTVドラマ、旅行先の風景、本屋で立ち読みをした時に目にした1ページ……。ほんの数秒前の出来事でさえもあいまいな自分自身の記憶や認識がなぜか一人歩きして、まったく別のイメージへと変質してしまう気持ち悪い感覚。そのような体験から、私は私達が住むこの世界を客観的な視点で見るとどのようなものになるのか?といった疑問を持ち始めました。例えば私達が外から受ける情報や感覚が認識として自身に定着する前の状態とは一体どのようなものだろうか、あるいは外部から身体に受ける「純粋な感覚」とはどのようなものだろうか。もちろん、そのようなものを考えたり、想像したりすることすら、私たちにはほぼ不可能です。なぜなら、私たちの「見る」あるいは「感じる」という行為は、絶対的に主観の支配する「認識」の呪縛から永遠にできないからです。

そこで私は身体が接する世界を純粋に取り入れる、つまり、想像したり考えたりすることなく、記憶に変質する前の状態を取り入れることのできる装置を制作することを試みました。ただひたすらに「外部」を純粋に写し取る存在。それが一連の"skin hole" Projectに使われているskin hole camera(人型ピンホールカメラ)です。私自信の身体をかたどって作った等身大の暗箱のいたるところに、毛穴に見立てたピンホールレンズの穴を穿ち、カメラオプスキュラの原理によって外の世界を内部に投影し、フィルムや印画紙に定着させるという試みでした。もちろん、内部に印画紙やフィルムなどという感光体があるとなかろうと、彼の「身体」の内部では絶えず外の世界が投影され続けている。それは、主観的な視点から逃れ、人と世界との間に客観的な視点を投げかける象徴的な存在だと私は考えています。

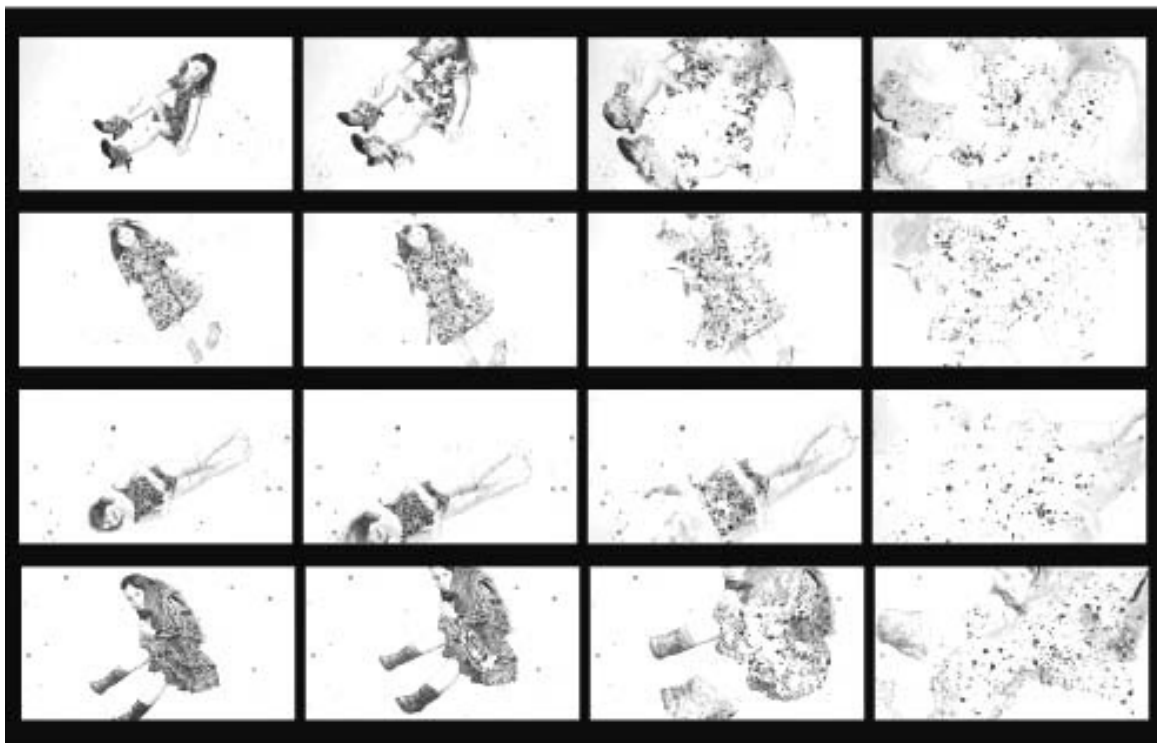


skin hole photographs (#01Duesseldorf / 48 枚うちの10 枚) ゼラチンシルバープリント 2003 年

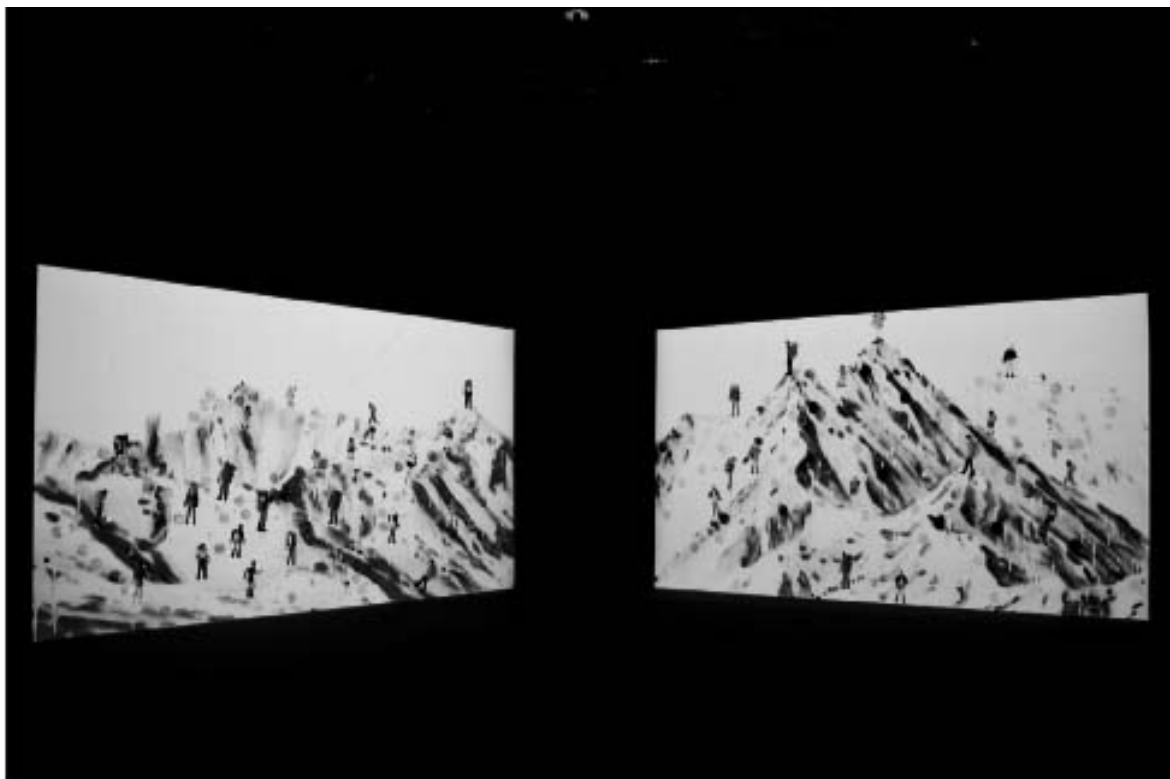


water drawing-Phantom- 2009

映像インスタレーション
個展 "PHANTOM-water drawing" 展示風景 / MIKIKO SATO GALLERY、ハンブルグ



water drawing -Phantom- 映像部分 (HD/12 分 ループ) 2008 年



“Life Climbing/Climbing the World” 2009

映像インスタレーション (2面スクリーン)

Exhibition as media 「drowning room」 展示風景／神戸アートビレッジセンター



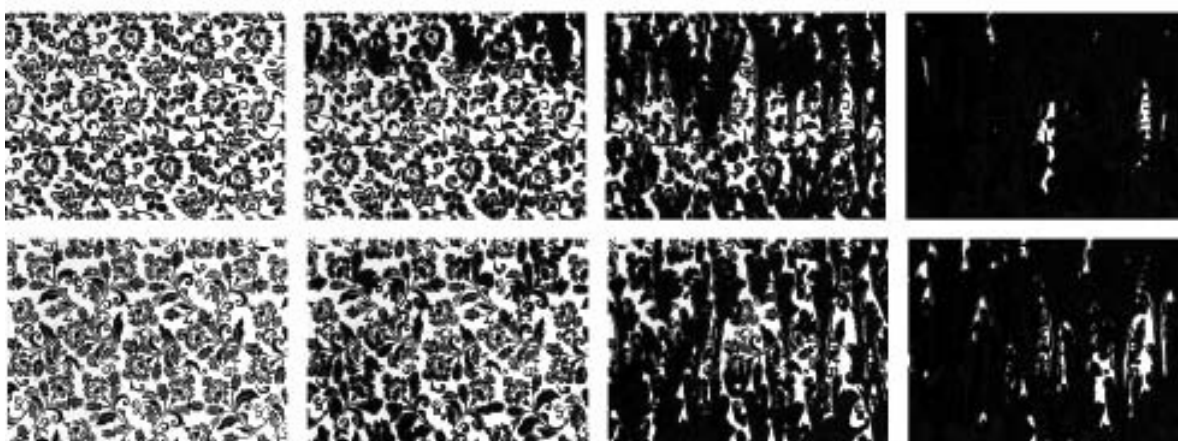
“Life Climbing/Climbing the World” 映像 (2チャンネル/HD/12分ループ) 2009年



“dimension wall” 2010

インスタレーション

個展「dimension wall」展示風景／ギャラリーほそかわ、大阪



“dimension wall” 映像 (HD/9 分 51 秒 ループ) 2010 年